

森
鷗外

最後の一旬



最後の一句

元文^{げんぶん}三年十一月二十三日の事である。大阪で、船乗業^{かづらやたるべえ}桂屋太郎兵衛と云うものを、木津川^{きづがわぐち}口で三日間^{さくら}曝した上、
 斬罪^{ざんざい}に処すると、高札^{こうさつ}に書いて立てられた。市中到る処
 太郎兵衛の噂^{うわさ}ばかりしている中に、それを最も痛切に
 感ぜなくてはならぬ太郎兵衛の家族は、南組堀江橋^{ぎわ}際の
 家で、もう丸二年程、殆^{ほとん}ど全く世間との交通を絶つて
 暮しているのである。

この予期すべき出来事を、桂屋へ知らせに来たのは、

程遠からぬ平野町に住んでいる太郎兵衛がにようぼう女房の母であつた。この白髪頭しらがあたまの媪おうなの事を桂屋では平野町のおばあ様と云っている。おばあ様とは、桂屋にいる五人の子供がいつも好いい物をお土産みやげに持って来てくれる祖母に名づけた名で、それを主人も呼び、女房も呼ぶようになったのである。

おばあ様を慕つて、おばあ様にあまえ、おばあ様にねだる孫が、桂屋に五人いる。その四人は、おばあ様が十七になつた娘を桂屋へよめによこしてから、今年十六年目になるまでの間に生れたのである。長女いちが十六歳、

二女まつが十四歳になる。その次に、太郎兵衛が娘をよめに出す覚悟で、平野町の女房の里方から、赤子のうちに貰い受けた、長太郎と云う十二歳の男子がある。その次に又生れた太郎兵衛の娘は、とくと云って八歳になる。最後に太郎兵衛の始はじめて設けた男子の初五郎がいて、これが六歳になる。

平野町の里方は有福なので、おばあ様のお土産はいつも孫達に満足を与えていた。それが一昨年太郎兵衛のにゅうろう入牢してからは、とかく孫達に失望を起させるようになった。おばあ様が暮し向の用に立つ物を主おもに持って来

るので、おもちゃやお菓子は少なくなったからである。

しかしこれから生おい立たって行く子供の元氣は盛んなもので、只ただおばあ様のお土産が乏しくななったばかりでなく、おっ母様の不機嫌ふきげんにななったのにも、程なく馴なれて、格別しお萎おれた様子もなく、相變あらず小こさい争鬪せうとうと小こさい和わ睦ぼくとの刻々に交代する、賑にぎやかな生活をつ續つけている。そして「遠い遠い所へ往いって歸からぬ」と言い聞きかれた父の代りに、このおばあ様の来るのを歡迎ごんげんしている。

これに反して、厄難あに逢あってからこのかた、いつも同じような悔恨と悲痛との外に、何物をも心に受け入れる

ことの出来なくなつた太郎兵衛の女房は、手厚くみついでくれ親切に慰めてくれる母に対しても、ろくろく感謝の意をも表すことがない。母がいつ来ても、同じような繰言くりごとを聞せて帰すのである。

厄難はじめに逢つた初はじめには、女房は只茫然ぼうぜんと目を漣みはつていて、食事も子供のために、器械的に世話をするだけで、自分は殆ど何も食わずに、頻しきりに咽のどが乾くと云つては、湯を少しずつ呑んでいた。夜は疲れてぐっすり寝たかと思つと、度々目を醒さまして溜息ためいきを衝つく。それから起きて、夜なかに裁縫などをすることがある。そんな時は、傍そばに

母の寝ていぬのに気が附いて、最初に四歳になる初五郎が目を醒ます。次いで六歳になるとくが目を醒ます。女房は子供に呼ばれて床にはいつて、子供が安心して寝附くと、又大きく目をあいて溜息を衝いているのであった。それから二三日立って、ようよう泊り掛に来ている母に繰言を言つて泣くことが出来るようになった。それから丸二年程の間、女房は器械的に立ち働いては、同じように繰言を言い、同じように泣いているのである。

高札の立った日には、午過ぎひるすに母が来て、女房に太郎兵衛の運命の極きまったことを話した。しかし女房は、母

の恐れた程驚きもせず、聞いてしまつて、又いつもと同じ繰言を言つて泣いた。母は余り手ごたえのないのを物足らなく思う位であつた。この時長女のいちふすまは、襖かげの蔭かげに立つて、おばあ様の話を聞いていた。

桂屋にかぶさつて来た厄難と云うのはこうである。主人太郎兵衛は船乗とは云つても、自分が船に乗るのではない。北国ほつくく通がよいの船を持っていて、それに新七と云う男

を乗せて、運送の業を営んでいる。大阪ではこの太郎兵衛のような男を居船頭いせんどうと云っていた。居船頭の太郎兵衛が沖船頭おきせんどうの新七を使っているのである。

元文元年の秋、新七の船は、出羽でわのくに国秋田から米を積んで出帆した。その船が不幸にも航海中に風波の難に逢つて、半難船の姿になって、積荷の半分以上を流失した。新七は残った米を売って金にして、大阪へ持って帰った。

さて新七が太郎兵衛に言うには、難船をしたことは港々で知っている。残った積荷を売ったこの金は、もう米主こめぬしに返すには及ぶまい。これは跡あとの船をしたてる費用

に当てようじゃないかと云った。

太郎兵衛はそれまで正直に営業していたのだが、営業上に大きい損失を見た直後に、現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇って、その金を受け取ってしまった。

すると、秋田の米主の方では、難船の知らせを得た後に、残り荷のあったことやら、それを買った人のあったことやらを、人伝ひとづつてに聞いて、わざわざ人を調べに出した。そして新七の手から太郎兵衛に渡った金高かねだかまでを探り出してしまった。

米主は大阪へ出て訴えた。新七は逃走した。そこで太郎兵衛が入牢してとうとう死罪に行われることになったのである。



平野町のおばあ様が来て、恐ろしい話をするのを姉娘のいちが立聞たちぎきをした晩の事である。桂屋の女房はいつも繰言を言って泣いた跡で出る疲つかれが出て、ぐっすり寐入ねいった。女房の両脇りょうわきには、初五郎と、とくとが寝ている。

初五郎の隣には長太郎が寝ている。とくの隣にまつ、それに並んでいちが寝ている。

暫く立って、いちが何やら布団の中で独言を言った。
「ああ、そうしよう。きつと出来るわ」と、云ったようである。

まつがそれを聞き附けた。そして「姉えさん、まだ寤ないの」と云った。

「大きい声をおしでない。わたし好い事を考えたから」
いちはず先まずこう云って妹を制して置いて、それから小声でこう云う事をささやいた。お父とっさんはあさって殺さ

れるのである。自分はそれを殺させぬようにすることが出来ると思う。どうするかと云うと、願書ねがいしょと云うものを書いてお奉行様ぶぎょうさまに出すのである。しかし只殺さないで置いて下さいと云ったって、それでは聴かれない。お父っさんを助けて、その代りにわたくし共子供どもを殺して下さいと云って頼むのである。それをお奉行様が聴いて下さって、お父っさんが助かれば、それで好い。子供は本当に皆殺されるやら、わたしが殺されて、小さいものは助かるやら、それはわからない。只お願をする時、長太郎だけは一しよに殺して下さいないように書いて置く。

あれはお父っさんの本当の子でないから、死ななくても好い。それにお父っさんがこの家の跡を取らせようと云っていらっしやっただから、殺されない方が好いのである。いちは妹にそれだけの事を話した。

「でもこわいわねえ」と、まつが云った。

「そんなら、お父っさんが助けてもらいたくないの」

「それは助けてもらいたいわ」

「それ御覧。まつさんは只わたしに附いて来て同じようにさえしていれば好いのだよ。わたしが今夜願書がんしょを書いて置いて、あしたの朝早く持って行きましようね」

いちは起きて、手習の清書をする半紙に、平仮名で願書を書いた。父の命を助けて、その代りに自分と妹のまつ、とく、弟の初五郎をおしおきにして戴いたきたい、実子でない長太郎だけはお許下さるようと云うだけの事ではあるが、どう書き綴つづって好いかわからぬので、幾度も書き損そこなって、清書のためにもらつてあつた白紙しらかみが残のこり少ずくなになつた。しかしとうとう一番いちばん鶏どりの啼なく頃に願書が出来た。

願書を書いているうちに、まつが寐入つたので、いちは小声で呼び起して、床の傍わきに畳ふだんぎんであつた不断着ふだんぎに

著き更かえさせた。そして自分も支度をした。

女房と初五郎とは知らずに寐ねていたが、長太郎が目を醒さまして、「ねえさん、もう夜が明けたの」と云った。

いちいちは長太郎の床の傍そばへ往いってささやいた。「まだ早はやいから、お前は寝ておいで。ねえさん達は、お父ちちさんの大事な御用で、そつと往いって来る所があるのだからね」
「そんならおいらも往いく」と云って、長太郎はむっくり起き上がった。

いちいちは云った。「じやあ、お起おき、著物おきを著せて上げよう。長さんは小さくても男だから、一しよに往いってくれ

れば、その方が好いのよ」と云った。

女房は夢のようにあたりの騒がしいのを聞いて、少し不安になって寝がえりをしたが、目は醒めなかった。

三人の子供がそつと家を抜け出したのは、二番鶏の啼く頃であった。戸の外は霜の暁であった。提灯ちようちんを持って、拍子木を敲たたいて来る夜廻よまわりの爺じいさんに、お奉行様の所へはどう往ゆったら往かれようと、いちがたずねた。爺いさんは親切な、物分りの好い人で、子供の話を見面まじめ面に聞いて、月番の西奉行所のある所を、丁寧いながきあわじのかみたねのぶに教えてくれた。当時の町奉行は、東が稲垣淡路守種信いながきあわじのかみたねのぶで、西が佐

佐又四郎成意なりむねである。そして十一月には西の佐佐が月番に当っていたのである。

爺いさんが教えているうちに、それを聞いていた長太郎が、「そんなら、おいらの知った町だ」と云った。そこで姉妹きょうだいは長太郎を先に立てて歩き出した。

ようよう西奉行所に辿たどり附いて見れば、門がまだ締まっていた。門番所の窓の下に往つて、いちが「もしも」と度々たびたび繰り返して呼んだ。

暫くして窓の戸があいて、そこへ四十恰好がっこうの男の顔が覗のぞいた。「やかましい。なんだ」

「お奉行様にお願があつてまいりました」と、いちが丁寧に腰を屈かがめて云つた。

「ええ」と云つたが、男は容易に詞ことばの意味を解し兼ねる様子であつた。

いちが又同じ事を言つた。

男はようようわかつたらしく、「お奉行様には子供が物を申し上げることが出来ない、親が出て来るが好いと云つた。

「いいえ、父はあしたおしおきになりますので、それに就ついて願ねがひがございます」

「なんだ。あしたおしおきになる。それじゃあ、お前は桂屋太郎兵衛の子か」

「はい」といちが答えた。

「ふん」と云つて、男は少し考えた。そして云つた。「怪けしからん。子供までが上かみを恐れんと見える。お奉行様はお前達にお逢あいはない。帰れ帰れ」こう云つて、窓を締めてしまった。

まつが姉に言った。「ねえさん、あんなに叱るから帰りましょう」

いちが云つた。「黙つてお出いで。叱ちられたって帰るの

じやありません。ねえさんのする通りにしてお出」こう云つて、いちハ門の前にしやがんだ。まつと長太郎とは附いてしやがんだ。

三人の子供は門のあくのをだいぶ久しく待った。ようよう貫木かんのきをはずす音がして、門があいた。あけたのは、先に窓から顔を出した男である。

いちが先に立って門内に進み入ると、まつと長太郎とが背後うしろに続いた。

いちの態度が余り平気なので、門番の男は急に支え留ささめとどめようともせずにいた。そして暫く三人の子供の玄関の

方へ進むのを、目を漣つて見送っていたが、ようよう我に帰つて、「これこれ」と声を掛けた。

「はい」と云つて、いちはおとなしく立ち留まつて振り返つた。

「どこへ往ゆくのだ。さつき帰れと云つたじゃないか」

「そう仰おっしやいしましたが、わたくし共は願ねがひを聞いて戴くまでは、どうしても帰らない積りでございます」

「ふん。しぶとい奴やつだな。とにかくそんな所へ往つてはいかん。こつちへ来い」

子供達は引き返して、門番の詰所へ来た。それと同時に

に玄関脇わきから、「なんだ、なんだ」と云つて、二三人の詰衆つめしゆうが出て来て、子供達を取り巻いた。いちが殆どこ
うなるのを待ち構えていたように、そこに蹲うづくまつて、懐
中から書附を出して、真先まつさきにいる与力よりきの前に差し附けた。
まつと長太郎とも一しよに蹲つて礼をした。

書附を前へ出された与力は、それを受け取つたものか、
どうしたものかと迷うらしく、黙つていちの顔を見卸みおろし
ていた。

「お願でございます」と、いちが云つた。

「こいつ等は木津川口で曝さらし物になつてゐる桂屋太郎兵

衛の子供でございます。親の命いのちごい乞するのだと云つています」と、門番がかたわら傍から説明した。

与力は同役の人達を顧みて、「ではとにかく書附を預かって置いて、伺つて見ることにしましょうかな」と云った。それには誰たれも異議がなかった。

与力は願書をいちの手から受け取って、玄関にはいった。



西町奉行の佐佐は、両奉行の中の新参で、うち大阪に来てから、まだ一年立っていない。役向の事は総すべて同役の稲垣に相談して、城代に伺って処置するのであった。それであるから、桂屋太郎兵衛の公事くじに就いて、前役の申継もうしつぎを受けてから、それを重要事件として気に掛けていて、ようよう処刑の手続が済んだのを重荷を卸したように思っていた。

そこへ今朝になって、宿直の与力が出て、命乞の願に出たものがあると云ったので、佐佐は先ず切角運ばせた事に邪魔がはいったように感じた。

「参ったのはどんなものか」佐佐の声は不機嫌であった。

「太郎兵衛の娘兩人とせがれ倅とがまいりまして、年上の娘が願書を差上げたいと申しますので、これに預っております。御覧になりましょうか」

「それは目安箱めやすばこをもお設もうけになつておる御趣意から、次第によつては受け取つても宜よろしいが、一応はそれぞれ手続のあることを申聞もうしきかせんではなるまい。とにかく預かつておるなら、内見しよう」

与力は願書を佐佐の前に出した。それを披ひらいて見て佐

佐は不審らしい顔をした。「いちと云うのがその年上の娘であろうが、何歳になる」

「取り調べはいたしません、十四五歳位に見受けまする」

「そうか」佐佐は暫く書附を見ていた。不束ふつつかな仮名文字で書いてはあるが、条理が善く整っていて、大人おとなでもこれだけの短文に、これだけの事柄を書くのは、容易であるまいと思われる程である。大人が書かせたのではあるまいかと云う念が、ふと萌きざした。続いて、上を偽る横着物おうちやくものの所為ではないかと思議した。それから一応の

処置を考えた。太郎兵衛は明日の夕方まで曝すことになつてゐる。刑を執行するまでには、まだ時がある。それまでに願書を受理しようとも、すまいとも、同役に相談し、上役に伺うことも出来る。又縦よしやその間に情偽じょうぎがあるとしても、相当の手續をさせるうちには、それを探ることも出来よう。とにかく子供を帰そうと、佐佐は考えた。

そこで与力にはこう云つた。この願書は内見したが、これは奉行に出されぬから、持って帰つて町年寄まちどしよりに出せと云えと云つた。

与力は、門番が帰そうとしたが、どうしても帰らなかつたと言ふことを、佐佐に言った。佐佐は、そんなら菓子でも遣^やつて、賺^{すか}して帰せ、それでも聴かぬなら引き立てて帰せと命じた。

与力の座を起^たつた跡へ、城代太田備中守資晴^{おおたびつちゅうのかみすけはる}が訪ねて来た。正式の見廻りではなく、私の用事があつて来たのである。太田の用事が済むと、佐佐は只今かようかよ^{さしず}うの事があつたと告げて、自分の考を述べ、指^{さしず}図を請うた。

太田は別に思案もないので、佐佐に同意して、午過ぎ

に東町奉行稲垣をも出席させて、町年寄五人に桂屋太郎兵衛が子供を召し連れて出させることにした。情偽があらうかと云う、佐佐の懸念けねんも尤もつともだと云うので、白洲しらすへは責道具せめどうぐを並べさせることにした。これは子供を嚇おどして実を吐かせようと云う手段である。

丁度この相談が済んだ所へ、前の与力が出て、入口に控えて気色けしきを伺った。

「どうじゃ、子供は帰ったか」と、佐佐が声を掛けた。「御意ごいでござりまする。お菓子を遣つかわしまして帰そうと致しましたが、いちと申す娘がどうしても聴きませぬ。

とうとう願書をふどころ懐へ押し込みまして、引き立てて帰しました。妹娘はしくしく泣きましたが、いちは泣かずに帰りました」

「余程情じょうの剛こわい娘と見えますな」と、太田が佐佐を顧みて云った。

十一月二十四日の未ひつじの下刻げこくである。西町奉行所の白洲ははればれしい光景を呈している。書院には両奉行が

列座する。奥まった所には別席を設けて、表向おもてむきの出座ではないが、城代が取調とりしらべの模様もようを余所よそながら見に来ている。縁側には取調を命ぜられた与力が、書役かきやくを随したがえて著座ちやくざする。

同心どうしん等が三道具みつどうぐを衝き立てて、厳いかめしく警固けいこしている庭に、拷問に用いる、あらゆる道具が並べられた。そこへ桂屋太郎兵衛の女房と五人の子供とを連れて、町年寄五人が来た。

尋問は女房から始められた。しかし名を問われ、年を問われた時に、かつがつ返事をしたばかりで、その外の

事を問われても、「一向に存じませぬ」、「恐れ入りました」と云うより外、何一つ申し立てない。

次に長女いちが調べられた。当年十六歳にしては、少し穉おさなく見える、瘦肉やせじしの小娘である。しかしこれは些ちとの臆おくする気色もなしに、一部始終の陳述をした。祖母の話を物蔭から聞いた事、夜になって床に入ってから、出願を思い立った事、妹まつに打明けて勧誘した事、自分で願書を書いた事、長太郎が目を醒さましたので同行を許し、奉行所の町名を聞いてから、案内をさせた事、奉行所に来て門番と応対し、次いで詰衆の与力に願書の取次を頼ん

だ事、与力等に強要せられて帰った事、凡そ前日来経歴した事を問われるままに、はつきり答えた。

「それではまつの外には誰にも相談はいたさぬのじやな」と、取調役が問うた。

「誰にも申しません。長太郎にも精くわしい事は申しません。お父っさんを助けて戴く様に、願しに往くと申しただけでございます。お役所から帰りました、年寄衆のお目に掛かりました時、わたくし共四人の命を差し上げて、父をお助け下さるように願うのだと申しましたら、長太郎が、それでは自分も命が差し上げたいと申して、

とうとうわたくしに自分だけのお願書ねがいしょを書かせて、持ってまいりました」

いちがこう申し立てると、長太郎が懐から書附を出した。

取調役の指図で、同心が一人長太郎の手から書附を受け取って、縁側に出した。

取調役はそれを披いて、いちの願書と引き比べた。いちの願書は町年寄の手から、取調の始まる前に、出させてあったのである。

長太郎の願書には、自分も姉きょうだいや姉弟きょうだいと一しよに、父

の身代りになって死にたいと、前の願書と同じ手跡で書いてあった。

取調役は「まつ」と呼びかけた。しかしまつは呼ばれたのに気が附かなかつた。いちが「お呼よびになつたのだよ」と云つた時、まつは始めておそるおそる項垂うなだれていた頭こうべを挙げて、縁側の上の役人を見た。

「お前は姉と一しよに死にたいのだな」と、取調役が問うた。

まつは「はい」と云つて頷うなずいた。

次に取調役は「長太郎」と呼び掛けた。

長太郎はすぐに「はい」と云った。

「お前は書附に書いてある通りに、兄弟きょうだい一しよに死にたいのじやな」

「みんな死にますのに、わたしが一人生きていたくはありません」と、長太郎ははっきり答えた。

「とく」と取調役が呼んだ。とくは姉や兄が順序に呼ばれたので、こん度は自分が呼ばれたのだと気が附いた。そして只目を漣みはって役人の顔を仰ぎ見た。

「お前も死んでも好いのか」

とくは黙って顔を見ているうちに、唇くちびるに血色が亡なく

なつて、目に涙が一ぱい溜たまつて来た。

「初五郎」と取調役が呼んだ。

ようよう六歳になる末子ぼっしの初五郎は、これも黙つて役人の顔を見たが、「お前はとうじや、死ぬるのか」と問われて、活澆かっぱつにかぶりを振つた。書院の人々は覚えほほえず、それを見て微笑ほほえんだ。

この時佐佐が書院の敷居際まで進み出て、「いち」と呼んだ。

「はい」

「お前の申立もうしたてには洵うそはあるまいな。若もし少しでも申し

た事に間違があつて、人に教えられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べである道具で、誠の事を申すまで責めさせるぞ」佐佐は責道具のある方角を指さした。

いち是指された方角を一目見て、少しもたゆたわずに、「いえ、申した事に間違はひややございません」と言い放つた。その目は冷かひややで、その詞は徐ことばかしずであつた。

「そんなら今一つお前に聞くが、身代りをお聞届けになると、お前達はすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることは出来ぬが、それでも好いか」

「よろしゅうございます」と、同じような、冷かな調子で答えたが、少し間を置いて、何か心に浮んだらしく、「お上の事には間違はございませんすまいから」と言い足した。

佐佐の顔には、不意打に逢ったような、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、険しくなった目が、いちの面に注がれた。憎悪を帯びた驚異の目とでも云おうか。しかし佐佐は何も言わなかった。

次いで佐佐は何やら取調役にささやいたが、間もなく取調役が町年寄に、「御用が済んだから、引き取れ」と

言い渡した。

白洲を下がる子供等を見送って、佐佐は太田と稲垣とに向いて、「生先おいさきの恐ろしいものでござりますな」と云った。心の中うちには、哀あわれな孝行娘の影も残らず、人に教唆せられた、おろかな子供の影も残らず、只氷のように冷かに、刃やいばのように鋭い、いちの最後の詞の最後の一句が反響しているのである。元文頃の徳川家の役人は、固もとより「マルチリウム」という洋語も知らず、又当時の辞書には献身と云う訳語もなかったので、人間の精神に、老若男女ろうじやくなんによの別なく、罪人太郎兵衛の娘に現れたような

作用があることを、知らなかつたのは無理もない。しかし献身の中に潜む反抗の鋒ほしざきは、いちと語ことばを交えた佐佐のみではなく、書院にいた役人一同の胸をも刺した。

城代も両奉行もいちを「変な小娘だ」と感じて、その感じには物でも憑ついているのではないかと云う迷信さえ加わったので、孝女に対する同情は薄かったが、当時の行政司法の、元始的な機関が自然に活動して、いちの願

意は期せずして貫徹した。桂屋太郎兵衛の刑の執行は、
 「江戸へ伺中うかがいちゆうひのべ日延」と云うことになった。これは取調
 のあつた翌日、十一月二十五日に町年寄に達せられた。
 次いで元文四年三月二日に、「京都に於いて大嘗会御執だいじょうえ
 行相成候ささうろうてより日限も不相立儀あいたたざるぎに付、太郎兵衛事、死
 罪御赦免被仰出ごしやめんおほせいだされ、大阪北、南組、天満てんまの三口御構おかまひの上
 追放」と云うことになった。桂屋の家族は、再び西奉行
 所に呼び出されて、父に別を告げることが出来た。大嘗
 会と云うのは、貞享じょうきょう四年に東山天皇の盛儀があつてか
 ら、桂屋太郎兵衛の事を書いた高札の立った元文三年十

一月二十三日の直前、同じ月の十九日に、五十一年目に、桜町天皇が挙行し給うまで、中絶していたのである。

日本文学電子図書館

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館